

森の民話茶屋通信 Vol.13

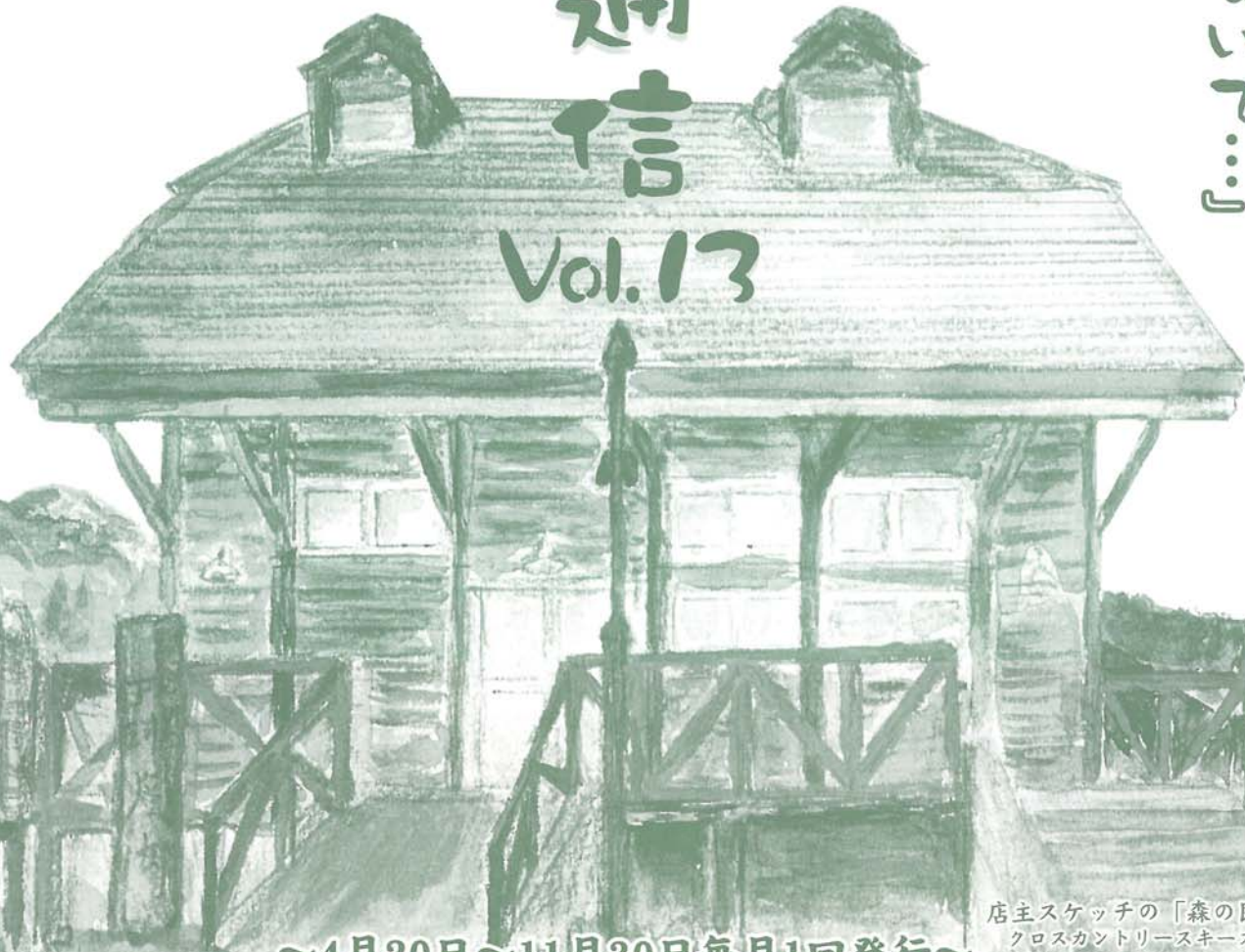
福島県地域づくりサポーター事業
『ふるさと』の民話とふるさと森づくり『...』



本宮在住の毎日の米国人女性とご友人達が、彼女を連れて、訪れてくださいました。



TUFの番組の撮影風景



店主スケッチの「森の民話茶屋」
クロスカントリーズスキーステーション

～4月20日～11月30日毎月1回発行～

発行責任者／森の民話茶屋店主 後藤みづほ
福島県安達郡大玉村玉井字前ヶ岳国有林7林班 Tel.0243-48-4648

店主が走る！村のオウツ子 Vol.13

ガダルカナル島の悲劇の証言者
三瓶留蔵さん(81才)・里さん(79才)ご夫妻を訪ねて
大玉村玉井字牛房内



今が一番幸せだナイ。
三夫婦の八人家族、曾孫は十八人。

黄金色の田んぼに要らない雨が降る日、三瓶さんご夫妻を訪ねました。留蔵さんは収穫したばかりの葡萄(ぶどう)・ハニーブラックを「一房ずつ手入れをしていらっしやいました。仕事の手を休めて茶の間に招いて下さり、貴重なお話を聞かせて頂きました。里さんもお茶を煎れながら、優しい笑顔で留蔵さんの辛い思い出話を包んで下さいました。

Q／先の大戦で、大変な戦地の経験をしていたら、しゃる方のお話は、是非聞いておくように...と先輩に教えられました。留蔵さんのお話を私たちに聞かせて下さい。

留／巧みな話ではないが...まあ大変だった。

Q／戦争に行かれたのは何才の時ですか？

留／19才だった。昔はみんな21才になると徴兵検査があって、歩兵だと1年半、特科だと2年の義務を果たすことになった。たのナイ。俺は体格が良かったもんだから、どっちみち徴兵になると思ひ、一日でも早くその義務を終えてしまおうと志願したんだ。

Q／昭和何年ですか？

留／昭和13年。

Q／除隊はいつ？

留／いいや、そのままずっと昭和20年の8月15日の終戦まで。最終は今のベトナムで。帰国出来たのが昭和21年5月だった。

Q／最初は何処に？

留／仙台に第2師団というのがある。福島、宮城、新潟の3県の出身者で作られている隊だった。入隊後直ぐに満州に、昭和14年のノモンハン事件の時「明日は総攻撃」という指令があってみんな荷物を砂に埋めている時に停戦協定が発表されたんだ。今思うと本当に生死の差は「運」としか言いようがない。

Q／それから？

留／昭和15年に仙台に帰ったがそれ、間もなく16年12月8日第二次世界大戦勃発だ。それも12月7日夜、何も知らないまま完全武装で出発し、千葉に着いて開戦を知った。そして広島から船、冬なのに夏服を渡されたので「ああ、南方へ行くんだな」と思った。船の中でマレー語を学び、当時オランダ領のジャワ島に着いた。そこまでは良かったが、次にガダルカナル島に行った。先に戦っていた日本軍が玉砕した後に入った。

米を入れた二本の靴下...それが上陸時の食料の全てだった。

それも煙が上ると敵に爆撃されるから煮炊きが出来ないし、食料や弾薬の輸送が出来ない中での戦いだった。一番むごかったのが歩兵の第一陣だ。アメリカはマイクを仕込んでおいて何処を歩いているかを察知し、爆撃をしてくる。又、一日一回降るスコールには身を隠す塹壕(たこぼら)に水が溜まり、そこに入っていれば水で体が衰弱する。ガダルカナル島の川は水がきれいなんだ。みんな水を呑みに川に行つてそこで死ぬ。川岸には...俺、お前さんに聞かれるからこうして語っているが、戦死した人たちの霊に対して...

Q／ごめんなさい。(突然絶句して涙する留蔵さんに)辛い話を...すみません。

留／いや、(氣を取り直して下さって)川岸に死体が累々とあつたが、すぐ別れてしまった。

Q／同郷の人と会うと、故郷のことなど話すのですか？

留／いや、そんなことはない。生きるか死ぬかの時は戦争のことしか話さないもんだ。ガダルカナル島には竹やぶがあつて、朝の中の爆撃がない時に竹の子をとって生で食べた。マラリアや精神を病んでしまう兵隊も多かった。

Q／ガダルカナル島で終戦を迎えたのですか？

留／いやいや、ガダルカナル島に2ヵ月半位いて撤退、米軍の侵攻で玉砕かと思つたが駆逐艦が来て着の身着のままキヤッチャーボートで脱出した。米軍は見つていた筈だが、攻撃は無かった。船の中の事は全く覚えていない。

俺は、ロシア、中国、米国、仏、英、オランダと戦つたんだこんな経験は二度としてはなんぼ。

Q／良く無事で...。

留／ガダルカナル島で右足の膝に艦砲射撃で銃弾を受け、それは今でも入ったままだし、次の戦地ビルマでは尻を削がれる銃撃を受けた。足は腫まなかったので助かったが、こっちは腫んで酷かった。ビルマでは野戦病院に...。

Q／どうして帰国させてくれなかったんですか？

留／一度負けた部隊は日本に帰されなかったんだ。

Q／当時の「位」は？

留／軍曹だったナイ。

Q／ビルマで終戦ですか？

留／いやいや、米軍が沖繩に上陸した後、九州か印南(今のベトナム)に来るのではないかと...ということで仏軍を撃退していたベトナムに布陣を命じられた。ベトナムの人たちとは心から交流があったナイ。

やがて終戦、占領軍として英軍が来て、約一年後に帰つて来た。

Q／8年間よく無事で...良かったですね。(お茶を煎れて下さっている里さんに...)

里／そう、そう。



Q／今、ご家族は？

里／4才と2才の曾孫も居て、三夫婦揃つて8人家族です。

Q／幸せですね。

お二人／そうぞい。今が一番幸せだ。

留／昭和51年、初めてのビルマ遺骨収集政府派遣団に、福島県から二人の中の一人に選ばれて行つてきた。ガダルカナル島にも二度遺骨収集に行つてきたナイ。

Q／今、改めて「大事な事」とは何だと思ひますか？

留／絶対命令の社会だったんだから、今とは又違うナイ。

ほんでも「忍耐」は大事だと思うナイ。

間もなく12月で満82才だという留蔵さんが語つて聞かせてくれた辛い経験は、私たちの想像以上の過酷なものだった筈です。それを乗り越えて、今の幸せを里さんと家族みんなで築いて来られたことに深い感動と尊敬の念を抱きました。そして、これからはみんな平和の大切さを教えて頂きたいと思ひながら辞しました。私の車を誘導して下さい。里さんの優しい笑顔が、又印象的でした。



遺骨収集の感謝状を指さす留蔵さん

秋こそ温かい民話を

一週間という短い間にもすっかりと秋に変わる「森の民話茶屋」の周辺です。途中の並木の「ナナカマド」や「ドウダンツツジ」の鮮やかで深い赤の色、萩の花のピンクと「ニセアカシヤ」の黄色と美しい限りです。

先日、安達郡内の中学校の先生方の研修会が白沢村公民館で開かれ、一時間半ほどの講演を依頼されました。夏休みに入ってから間もなくのことでした。百名を越す先生方の前で少し緊張しながら「ふるさととは好きですか？ 母なる言葉 母なる民話」というタイトルで語りました。

いくつかの安達地方に伝わる伝説や福島の民話を交えて、先生方に「教師になろう」と決心した時の初心を、そして能の創始者と言われる世阿弥の「花伝書」に書いてある「初心忘るべからず。時々の初心忘るべからず」の「時々の初心」を忘れないで欲しい。子どもたちに心に響く言葉を語って欲しい。教師は、言葉のプロとして、もっと言葉に感受性を持って欲しい。と語りました。

それから何日かして、講演を聞いて下さったという女性の教師の方々が「森の民話茶屋」に来店されたそうです。あいにく私は留守だったのですが、「講演を聞いた後、直ぐに登校拒否の生徒の所へ行きました。胸の熱い思いを忘れない間に。」と「森の民話茶屋」という所があるから気が向いたら行くといふと：と行って来ました。と話して行かれたそうです。

九月に入って、県の社会教育委員の研修交流会が楢葉町で開催され、そこでも「家庭教育と心の教育」の分科会で問題提起をするよう依頼があり、短い時間でしたが「森の民話茶屋」について発表させて頂きました。

その中でも青少年の心の荒廃、家庭の崩壊が強く熱く意見として出されました。今、人は皆な癒されたい。と願っているのでしょうか。社会全体が殺伐としているからなのでしょう。

さあ、「静かな秋」こそ温かい民話を味わいにお出で下さい。美味しい抹茶、温かいおにぎり、温かい豚汁、熱いコーヒーと一緒にどうぞ。美味しい民話、温かいおにぎり、温かい豚汁、熱いコーヒーと一緒にどうぞ。美味しい民話、温かいおにぎり、温かい豚汁、熱いコーヒーと一緒にどうぞ。

店主 敬白



↑9/11佐藤栄佐久福島県知事と一緒に。この日、フォレストパークでの会議の前に、ご来店くださいました。



↑前々日来店した、東京の大妻女子大学日本文学ゼミの皆さんと、偶然に県知事とばったり！知事は快く撮影に応じてくださいました。

TUFテレビ録画風景
10/5(17:30放送)、10/6(6:00再放送)



←本日のお料理はこれ！



←只今、本番中！

→打合せ中。



←スタッフが腕を振っていました。



↑プロデューサー、カメラマンの方にも食べて頂きました。



↑最後に、全員で！

これからの予定

◆10月14日(祝)
あだたら高原手打ち新そば
(鈴木宇一さん)

◆10月20日(日)
手作り豆腐の日(渡辺初治さん)
第1回10:15～
(1回のみ、カスピ海のヨーグルト作りがあります)
第2回12:15～

◆10月27日(日)
読書週間

